

〈私の書評〉

柴田 穂著 「毛沢東と周恩来」

中嶋 嶺雄
東京外国語大学

「批林批孔」運動の曲折に充ちた進行過程のなかにある中国は、いま、「毛沢東以後」ないしは「毛・周以後」の時代へ向けての歴史的な移行期にある。この移行期は同時に、現代中国の光と影が複雑に交錯し、共存する政治的な雌伏期だともいえる。

てはわが国のジャーナリストのなかでもっとも鋭い分析力を示し、たえず異彩を放ってきた著者が、前著『周恩来の時代』に次いで七二年春から七四年春までに執筆した十一の評論から成っていて、著者の一貫した立場は、「毛沢東と周恩来という、この傑出した思想家と政治家の二つの軸で中国をとらえるという分析方法」をとることにおかれている。とりわけ読者をひきつけるのは、「毛沢

東主義時代”の終息”という立場から、「いまや”周恩来の時代”が本格的に展開され始めた」として、脱文革の大きなうねりを分析し、林彪失脚の背景を周恩来と林彪の対立と見て分析している周恩来体制確立のプロセスである。たしかに、林彪の失脚、米中首脳会談、日中接近のプロセスは、まさに「周恩来の時代」を思わせるものがあり、「実際政策が事実上、毛沢東の革命路線の否定の上に立って展開され」、「毛沢東思想と、毛沢東路線の主要な特徴が否定されて」、「政策面における非毛沢東化の進行は、もはや阻むことのできない力で進んでいる」ように思われた。このようなダイナミックな中国政治のプロセスを、著者は、鋭い着眼力と冷静な判断力によってか

慶応義塾大学
法学研究会叢書

松本三郎著

一八〇〇円

中国外交と 東南アジア

◇主要目次◇
中国の東南アジア政策—その政策の基調/中国
と北東アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史
中国と東南アジアの政治史と中国外交の歴史

中村菊男 ¥1800
近代日本政治史の展開

藤原守胤 ¥2000
アメリカの民主政治

内山正熊 ¥1600
現代日本外交史論

A.B. ウラム ¥1500
奈良和重訳

未完の革命
—工業化とマルクス主義の動態—

〔発売元〕
慶応通信

東京・三田2-19-30
TEL (451) 3584

図書目録呈

らまった糸をときほぐすように分析し、「君臨すれども統治せず」ともいえる現在の毛沢東の立場を端的に映し出すことに成功している。そして、このような経過のなかでの鄧小平の復活こそ「脱文革化」の象徴的事件だとみなし、鄧小平復活は同時に五六年の「八全路線への回帰」だと説いている。従って、新しい党の再建は、「九全体制から離脱した『周恩来体制』下の党再建であり、極言すれば『周恩来の党』の建設であろう」と著者は予測していたのであった。このような見方に立つ著者は、鄧小平復権も周恩来体制の枠組のなかでの出来事だとみなしており、昨夏の十全大会は、「毛沢東以後」の時代に備えるために、「ほぼ完全に周恩来首相のコントロールのもとに開かれた」ものだったといきっている。そして、十全大会における王洪文の登場は、周恩来路線による「文革派の分断」の成功によるものであり、王洪文も、張春橋も、実務派行政派としての周恩来路線に組するものだとし、十全大会と前後して起った「批林批孔」運動についても、「文革派の自己防衛策」としての側面があるものの全体的には周恩来路線のコン

トロールのもとに置かれているとして、「批林批孔」運動にみられる「周恩来危機説」を完全に否定している。以上で紹介したように、著者は、文革の挫折から「批林批孔」運動までの激動の政治過程を、「周恩来体制」の揺るぎない確立の過程とみなしており、「こんにちの中国の政策決定のほとんどが周恩来の指導力に負っており、毛沢東の最高指導者としての権威も、周恩来によって『保護』されていると見ざるを得ないのである」とまで力説している。

このような著者の一貫した立場は、きわめてユニークなものであり、本書を野心的な著作たらしめているゆえんである。今後、著者のこの野心的な仮説がどのように実証されてゆくのか大いに注目すべきものがあるが、中国の政治の大きな方向が、今後さまざまな曲折を経ながらも、革命主義よりも現実主義の方向をたどらざるを得ないことは、もはや逆えない時代の流れであることは否定し得ないであろう。だが同時に、それゆえにこそ、このような潮流に逆らおうとする「反潮流」の動きが内在するのであり、「批林批孔」運動はまさにそうした「反潮流」運動であるといえる。だ

から本年春以来、「周恩来の時代」に翳りが見え、「批林批孔」運動のなかに周恩来批判が含蓄されていることも、著者の予想した周恩来体制下の全国人民代表大会が依然として未開催であることともいかにかんともしがたい事実である。この点で十全大会以降のプロセスの分析には、中国の文献にもっと即した分析がほしかったし、立論にかなり強引な個所も見られないではない。西側の学者やジャーナリストの言による傍証も、やや恣意的であるように思われる。著者の見方は毛沢東絶対化論を排するあまり「周恩来絶対化論」に陥っているのではないかとする一部の批判を念頭に置いたためか、立論上、わが国における「文革派優位説」に立った「周恩来危機説」を想定した、それへの反論も多いが、「周恩来危機論」はそれほど単純な図式によるものではないようにも思う。これらの点で立論の仕方はいま少し注意がはらわれるべきではなかったかとも思われるが、本書が激動の中国をとらえるためのきわめて有益な指針となるであろうことはいままでもなく、まさに時宜に適した好著として広く読者に推奨したい。